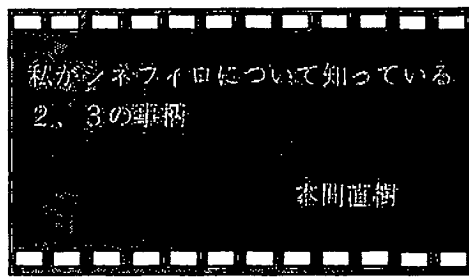
Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 私がシネフィロについて知っている2、3の事柄 |
| Author(s) | 本間, 直樹 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 45-46 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/71178 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University




シネフィロは面白い――これが最初の感想。私はパリで多くの哲学カフェを経験したが、これといった方法論もないまま、司会者の力技がなければカオス状態に終わってしまう後者に比べ、シネフィロでは人々はスムーズにテーマに集中し、ゆっくりではあるが映画の核心部分とそれを支えるある種の観念に触れることができる。どうしてだろうか？

ラミレズ氏が適確に述べているように、映画をみることはまぎれもなく一つの経験だ。哲学カフェにはそれが欠けている。有り体に言えば、方法論なしの哲学カフェは参加者の「妄想」の捌け口となる。それは具体的な経験でも明確な概念でもない混乱した観念だ。そもそも自分の経験を距離をおいて記述することは難しいうえに、さらに事後的に多数で共有することは一層困難だ。そのためには文学的な能力や聴取る技法が要求されるし、自分の経験を曝し出す発言者にもリスクがかかる。

参加者の具体的な体験の記述をもとに議論する「（ネオ）ソクラテス的対話（ソクラティク・ダイアローグ）」という方法がある。人々が魅了されるのは、言葉による経験の記述の層とそれを支える諸観念の層が見事に析出される瞬間がそこに生じるからだ。うまくいったシネフィロには同様のこと、いやそれ以上を見いだすことができる。まず参加者全員が二時間ほどの経験を共有する。これはソクラテス的対話にはないメリットだ。そして映画の後で参加者が映画を言葉で記述する。それは解釈学的な作業であり、一つの動作、一つの映像を理解するための解釈や観念の枠組みが問われることになる。もちろん司会者の技量によるところも大きいが、カフェフィロ的な漂流ないし空中戦にならないのは、準拠すべき経験が厳然とそこにあるからだ。題材なしの哲学的対話が終わるとするに忘却さ

れてしまうのに対して、映画の経験そのものはその後も私たちの経験の一部として生き続ける。それだけに上映直後のこの時間は経験の吟味する哲学にとって大変貴重なのだ。

もう一つ比較のためにパリでしばしば開かれる映画作家を招いての上映会をあげておこう。観客にとっては映画作家は文字どおり「創造主」の位置にあり、両者の間に交わされる言葉は一方通行で、発言内容も良くも悪くも「マニアック」だ。撮影の苦労話や作家の意図などを聞くにつけても、一度出来上がった作品にとって作家はもはやその「外部」に位置するのだと思い知らされる。

パリ留学中の本間講師と愛犬まめ

ところで、私のたっての希望で、是枝裕和監督作『ワンダフルライフ』のシネフィロが実現した。死後に天国に向かう中継地点で死者たちが生前の一瞬を選択し、それ映画によって再現し、その映像の記憶をもって彼ら彼女らは昇天する。「人生」と「映画」の並行関係を見事に描き、「一つの瞬間を永遠に生きる」というきわめてニーチェ的な主題を扱った作品ではあったが、よく理解できなかった観客も多かったようだ。キリスト的世界観をもつ参加者の一人は、人生はより幸福な未来向かうプロセスであり、一瞬だけを選ぶことはナンセンスであると主張し、別の参加者は、どうして死を迎えた後の人たちがなぜあのように平然としているのかが分からないと述べていた。

蛇足ながら、最後にパリの哲学カフェ事情について一言。正直なところ、パリの哲学カフェは病んでいる。より正確には、動けないでいる。哲学カフェの数は減少し、参加者は固定しているうえ(多くは定年退職者)、「参加者が平等に発言できること」はいまや検証の必要のないイデオロギーになり、司会者の技術や方法も吟味や評価のないまま個人芸に終わっている。大学の職業哲学者はカフェフィロを見下し(無視し)、カフェフィロフリークは「知識人」を毛嫌いしている。(ラミレズ氏は哲学の方法と理論を重視し、哲学カフェの社会のなかでの機能を考えるごく例外的な存在だ。)大学の専門家が音頭を取ってカフェフィロを開くという日本の現状は彼ら彼女らにとっては驚愕の対象であるといってよい。しかし、今後哲学カフェをどこで、どのような方法論で、どのような人たちと行うのか、私たちの課題は大きい。

(ほんまなおき)